

## 恒藤恭の少年小説「王冠をつくる人」

古澤夕起子

一

恒藤恭は明治二十一年（一八八八）鳥根県松江市に生まれ、第一高等学校から京都帝国大学に進んで法哲学者となった。京大法学部の教授であった昭和八年（一九三三）、瀧川幸辰（同学部教授）の著書への発禁処分を端を発したいわゆる京大事件の時、同僚と共に文部省に抗議辞任した一人で、その折に発表した「死して生きる途」（改造、昭八・七）で知られている。戦後は大阪市立大学の初代学長を務め、平和問題談話会など広く平和運動に関わった。

第一高等学校（以下、一高と略称）では第一部乙類（文科英文科）に在籍し、同級生芥川龍之介との交友を回想した『旧友芥川龍之介』（朝日新聞社、一九四九・八）の著書がある恒藤に「少年小説といってよい作品があることを知ったのは、関口安義の評伝『恒藤恭とその時代』（日本エディタースクール出版部、二〇〇二・五）による。同書に教示を受けて、別稿「恒藤恭の少年小説」<sup>①</sup>に「中学世界」掲載の一三編についての評価と位置付けを試み、一高時代の作品にはすでに、強い自我意識、弱者へのヒューマンなまなざし、信仰などがモチーフとされていること、京大進学の後も文学表現の一つとして少年小説が書き続けられたことを述べ、京大時代の代表作として「王冠をつくる人」を挙げた。本稿ではこの作品を中心に考察したい。<sup>②</sup>（恒藤姓は大正五年恒藤まさと結婚して以降の

もので、本稿の対象とする期間は旧姓の井川であるが、恒藤恭としての社会的活動の礎に少年小説の執筆もあると考え、恒藤に統一した。）

二

「王冠をつくる人」は「中学世界」（博文館、大四・六 第一八巻第八号）に掲載された。恒藤は掲載当時二七歳、京大法科大学政治学科の三年生になっている。当該号は「世界の学生」という特集号で、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカの学生生活の紹介、国内では、一高、二高、三高をはじめ東京高商、大阪高等工業、士官候補生などの紹介がされている。「王冠をつくる人」は「学生小説」の角書きを付して巻末に置かれ、読み切りであるが四〇〇字詰にして八〇枚の分量があり、一五章からなる。署名は「鈴かけ次郎」、挿絵は池田永治。ほとんど知られていない作品であるから、少し詳しくあらすじを記しておく。

四月十日に誕生日を迎えた中学四年生の「僕」（謙ちゃん）は、自宅での誕生日会に「幼稚園からのチアレスト・フレンド」である「政ちゃん」を招待して、母や姉、妹らとご馳走を囲む。「蓄音機に合せて僕たちの大好きな仏蘭西の国歌」を繰り返し歌い、みんなでゲームに興じて楽しい誕生日会は終わる。その日の夕方、「活動写真を見にはひると云ふ方略」を胸に、「僕」は「敏兄さん」の家へと出かけて行く。

「敏兄さん」の姓は白井、「僕の阿母さんの従兄の子」で「僕が幼い時から大好きな人のひとり」である。「一昨年大学を出た法学士で、学習院出にしては珍しい好い成績で卒業した」という人。政治家だった父親は三年前に亡くなり、継母と異母妹との三人で五番町の邸に暮らしている。「五番町」は現在の麹町区一番町、皇居の西側に位置する高級住宅地である。映画を見に行くという当ては外れて、「僕」は「万年町」という「有名な貧民窟」に行くはめになる。兄さんにくつつくようにして「なほ狭い幅三尺くらゐな路次」へ入っていくと、「両側は屋根の低い、壁のぼろ／＼に剥げた長屋」、間口は「一間か一間半位宛に細かく劃つてあつて、ところどころに蓆囲ひの便所らしいものが入口のあたり」に附いて「いて、中をのぞくと、黒い人間の姿が蠢々して」いる。泣き喚く赤ん坊、怒鳴りあう男と女、戸口に立って「険しい目付をしてながめ」る人たち。「饅えつたやうな徴びたやうな変なしつこい臭いが鼻について胸がむか／＼」するし、路に敷かれた板切れをうつつかり踏めば「バシヤリぬかるみの水が撥ねあがる。「こんなところに能く人間が住まへることだと思つた、暗い！汚い!!臭い!!!」と「僕」は恨めしい気持ちになる。驚いたことに敏兄さんは、一年も前から「万年町」に入つて「愛交会」の活動を始めていたという。

兄さんの姿を見て、たくさんの子どもたちが駆け寄ってくる。みんなは敏兄さんの振る竹の鞭につれて讚美歌「みくにのよつぎ」を歌い、釣り込まれて大きな声で歌つた「僕」もすつきりした心になつて一緒に祈りをする。それから兄さんのお伽噺。「少年が黄金の笛を吹くと大勢の人々がみんな魔法にかゝつて恍惚してしまふといふ光景その儘」に子どもたちも話に聞き入る。「僕」もリーダーで読んだ勇敢なフランスの少年の物語をみんなに話してやり、「主われを愛す」を歌つて子どもたちは帰っていく。

「愛交会」の会員は町に住むその日暮らしの労働者とその家族で、現在二〇軒ばかり。「毎月十日の晩」に集まりを持つている。資金は今のところほとんど兄さんが出して、健康診断をしたり、共同風呂を建てたりしているが、会員も毎日少しずつ貯金をしていて、将来は会員同士で融通したり、運営したりできるようにしたいのだという。産まれた子どもに名前をつけてくれという男、病気の母親を感心に世話している男、奉公先を飛び出した息子の相談、新入会員の鑄掛屋の紹介、敏兄さんの時事的な話……一時間になつて会は終わり、肌寒くなつた深夜の坂道を黙つて二人は帰っていく。

二、三日経つて、「暗い木の蔭に立つてゐるトルストイの肖像」の額が掛けられた敏兄さんの部屋を訪ねた「僕」は、「愛交会」の子どもの集まりを手伝いたいと申し出て、日曜日ごとに万年町にでかけて子どもたちの世話をするようになる。親友の政ちゃんも「僕の仕事」に興味を持って手伝ってくれるようになるのだった。

最終場面は五月のある静かな日暮れ、兄さんの邸の藤棚の下である。敏兄さんは邸を出て下谷で暮らす決心をしたと「僕」に告げる。財産は異母妹に譲り、「仕事に要るだけの費用をもらつて出てゆく」のだと聞いて、「僕」は兄さんの「前途が危まれるやうな気」になるのだった。そして「僕」はずつと心にかかつていた問い、「どんな人が偉い人なのか」について兄さんに尋ねてみる。「それはキリストだ!」、ことばに力をこめて兄さんはきつぱり言つ。

そのキリストの栄をかざる王冠は僕たち各自が一つ宛つくらねばならないんだ、僕の行らうとしてゐる事業はどれだけの価値も無いものかも知れない、けれどそれはね、キリストの栄をかざる王冠をつくるための、はかないはかない、僕の努力なんだ。

「僕」はその刹那に先日政ちゃんが作ったタンポポの花の冠の眩しい美しさを思い出し、「敏兄さんのつくりあげる王冠はどんなにかうつくしいだらう」と思う。政ちゃんの冠は「人間の王の王」であるナポレオンに捧げられたものであったし、敏兄さんの冠は神の栄を飾るもの。……しかし僕にはそれがつくれないんだらうか」と僕は黙って敏兄さんを見まもるのであった。

## 三

「王冠をつくる人」のテーマは 自分が理想とするのはどんな生き方なのか ということにある。つまり いか生きるべきか という永遠のテーマを少年小説として扱っているわけである。そこで留意したいことは、作品の始まりが四月十日の「僕」の誕生日に設定されている意味である。中学四年生であるから満一六歳の誕生日を迎えたことになる。「蓄音機に合せて僕たちの大好きな仏蘭西の国歌」を繰り返し歌い、家族に祝われる楽しい誕生日の様子からは、経済的に恵まれた、知的で暖かな家庭にのびのびと育った少年であることが窺われる。その日の夕方、「活動写真を見にはひると云ふ方略」を胸に、いそいそと「敏兄さん」の家へと出かけて行った「僕」は、想像もなかった貧しい町に連れていかれて、そこに暮らす子どもやおとなに出会う。「こんなところ」に能く人間が住まへることだと思つた、暗い！汚い！！臭い！！と嫌悪感しか抱かなかつた「僕」の目に、敏兄さんの隠された一面が映るのである。

を帯びて光つてゐた、しかし又是れまで僕が見たどの時よりも奥深い懐かしみがある。瞳のなかに籠つてゐた、僕は何かしら不思議な事を経験したやうな気がして、双つの手の指を組み合せて膝の上に当たつた儘凝と考へてゐた。

貧しい子どもたちのために祈り、活動している兄さんの目には「力のある強い輝き」があり、瞳には「奥深い懐かしみ」が宿っている。「何かしら不思議な事を経験したやうな気がして」「少年は心を揺さぶられ、子どもの集いの世話をするようになるのである。遠足に連れていった子どもたちは、「電車によるこび、菜の花や麦の畑によるこび、雲雀の轉りに悦び、おすしや団子によるこび、山のうへの遊びに悦んで、かれらの喜びと満足とは泉の水のやうに限り無く流れ涌くのだ。他人のために働くことで得られる喜びを少年は初めて経験する。一六歳の誕生日は少年の 第二の誕生日 となつて、少年は社会に目を開き、困難な立場にいる人に手をさしのべる経験をするのである。

では、いかに生きるべきか というテーマはどのように作品化されているだらうか。それは作品中に何度か繰り返される「どんな人が偉い人と謂つて好いだらうか」という問いかけを核としている。誕生日の夕方、万年町に向かう道すがら、「謙ちゃんはどうな人に成り度いと思つてるの？」と兄さんに聞かれた「僕」は、「まだ判然と是れつて定りませんけど、何んでも偉い人に成り度いつて事だけは始終考へてます」と答える。すると兄さんは、

「さあその偉い人といふのは問題だね、どんな人が偉いと謂つて好いだらうか？」

祈りを終つて敏兄さんが顔を上げた時、その眼は力のある強い輝き

と問いかけるのである。それ以来、「僕」はそのことを考え続ける。

タンポポの花の美しい野原に政ちゃんと出かけた日のこと。海軍中尉になって南洋から帰ってきた叔父さんの話に夢中の政ちゃんに、「一体どんな人が世界で一等偉いと思ふの?」と聞いてみる。「ナポレオンだ無論」と答えは明快である。「誰れが何んと言つたつてあれ程痛快な事をやつて退けた人はありやしない、超人だ! 人間の王の王だ!」と政ちゃんは言う。「僕」は正直に、幼い時には父親が、小学生になってからは先生が、もう少し大きくなると楠正成が世界で一番偉いと思つていと話し、「中学へはひつた頃から大分曖昧に成つて来たが今ではさつぱり解らなくなつた」と言う。物足りなさそうな顔をしていた政ちゃんは、その辺りのタンポポの花を摘み始め、「どうだい、うつくしいだろう! 王様の冠をこさへるんだ! 黄金の冠をこさへるんだ」と高く捧げる。最終場面で「僕」が思い出す花の冠がこれである。

またある日には、同窓会の打ち合わせに小学校の校長だった楠山先生を訪ねた折に聞いてみる。「えらいと云つてもいるくある、世の中にはいろいろの方面があつて、それくの方面にそれくの偉い人がゐる」と先生は言われる。政治家では大隈さん、相撲取りでは太刀山、軍人では東郷大将、盗人でも石川五右衛門くらいになると偉い、とお茶をすすつて、「ぢやが人間として偉いといふのはまたそれとは別ぢや」と先生のことばは続く。では、どんな人が「人間として偉い」のか? 「誠を以て終始する人ぢや」というのが楠山先生の答えである。

「王冠をつくる人」という標題の由来する、作品の結びの場面で「僕」は「どんな人が偉い人なのか」を兄さんに尋ね、兄さんはことばに力をこめてきつぱりと「それはキリストだ!」と答えている。では、「一番偉い人」はキリストだというのが「僕」の納得した結論なのか、と云えば留保が必要だろう。困っている人、弱い立場の人に手をさしのべるこ

のできる人が 偉い人 であることを少年は学んできた。だからこそ、兄さんの作り上げる王冠はどんなに美しいだろうと思つたのである。「しかし僕にはそれがつくれないんだらうか」と黙つて考えている「僕」の姿には、どんな人が偉い人なのか、そしてその偉い人になるために人はいかに生きるべきなのかと、これからも考え続けていくであろうことが示唆されているのではないか。

「どんな人が偉い人と謂つて好いだらう?」と考え続け、友人の「政ちゃん」と話し合つたり、小学校の校長先生に尋ねてみたりすることは、兄さん 僕 という一方通行のベクトルに陥りがちな展開を救つている。また「中学世界」が対象とする年齢の読者にとつて、作品のテーマに直結するこの問いは具体的で切実なものとして自問され、少年がおとなになる大切な過程を、この作品を読むことで追経験することにもなるのである。

「僕」の第二の誕生日の産婆役を務めるのは「敏兄さん」である。「僕」を万年町に連れて行く途上で、兄さんが突然こんな質問をする場面がある。

「謙ちゃんはね、斯んな事を考へて見た事があるかい? ……僕がいまにどんな人に成るんだらうつてなことを」

これは奇妙な質問である。現在「京橋にある×××会社」に勤めている兄さん自身について、これから「どんな人に成る」のか考えたことがあるかと聞いているのだから。しかし周囲も兄さんの会社勤めはとりあえずのものであると考へているらしい。何しろ亡父は政治家、本人は好成績で大学を出た法学士、政治家としての基盤、財産、学歴の揃つた青

年なのだ。「僕」は「平常ばんやり考へてゐた事をその儘」答える。

「きつとあのお亡くなりになつたを皆さんのやうに政治家におなりか、それで無かつたら偉い実業家にお成りになるんでせう」

それに対して兄さんは、そう思つのも無理はないと言ひながら、

「僕あ政治家に成らうとも実業家にならうとも思つてやしないよ」

と答えるのである。

何気ない会話の中に、人生というものは政治、経済でつくるものではない という大正期の知識人青年の思いが洩らされる。例えば河上肇が『貧乏物語』(大六・一)の刊行時に付録としてイギリスの政治家ロイド・ジョージ論を収め、「氏は真に貧乏根治の必要を理解せる大政治家の一人として、著者の平生最も尊敬するところ。あわせ録して敬意をいたすの徴となすゆえんである。」と記したように、「政治」がなしうることへの期待値は高かつた。また、「実業家」に「偉い」をつけた「僕」の意味するところも現代の 勝ち組 実業家ではない。しかし、政治でも実業でも自分の人生は満たされないという思いが敏兄さんにはあるのである。

「敏兄さん」はキリスト教を深く信仰して、スチユヂョ書齋には「暗い木の蔭に立つてゐるトルストイの肖像」を掛けている。「一昨年大学を出た法学士」とあるから年齢は二十六、七歳、執筆時の恒藤自身に重なる。「学習院出」で外へ転じ、キリスト教やトルストイの影響を受けた者と云つて、中等科を卒業して札幌農学校予科に編入学した有島武郎(明治一一年生まれ)、高等科を卒業して東大の英文科に入った志賀直哉(明治

一六年)、哲学科に入った武者小路実篤(明治一八年)、また神戸衛生院で恒藤と共に療養生活を送つた郡虎彦(明治三年)など恒藤自身(明治一年)の前後に生まれた「白樺」のメンバーが思い浮かぶが、この中の誰かがモデルというわけではなくて、大正期の知識人青年の典型として形象されているのだらう。とはいえ、恒藤の一高時代の日記である『向陵記』<sup>④</sup>、大正二年(一九一三)二月四日には次のような記事があり、敏兄さんの形象に影響を与えたと考えられる二人の人物と関わるので引いておく。

長崎君は友人の新居君と出ていったので、長崎君が青年会から借りてきたトルストイ伝をよんだ。非常におも白かつた。(略)あのトルストイの肖像をみてみると、あのひとみがわたしの胸の底まで、つらぬくやうなこゝちがする。<sup>⑤</sup>

「長崎君」は熱心なクリスチャンである親友長崎太郎。恒藤と共に一高の文科から京大の法科に転じ、同じ政治学科に在籍して親しく交わつた。恒藤は大正三年の夏を長崎太郎の故郷高知に過こし、その体験は少年小説「珊瑚を砕く」(「中学世界」大五・二(同六))となつた。敏兄さんの形象に深く関わつたと思われる人物である。また「新居君」はおそらく徳島出身の新居格にいしいたかで、賀川豊彦の従兄にあたる。恒藤と同年の賀川豊彦が神戸の貧民窟「新川」で路傍伝道を始めたのは、恒藤が神戸衛生院に入院していた翌年、明治四二年九月のことである。以来十年余の「貧民窟伝道」は『死線を越えて』(改造社、大九・一〇)に小説化されてベストセラーとなつた。賀川もまた、次章に言及する「竹の鞭」の「K氏」や「敏兄さん」の形象に影響を与えたことが考えられる。

## 四

作品中に「欧羅巴の戦争の話」をする場面があるから、発表当時の大正四年（一九一五）頃を作品の時代背景としてよいだろう。第一次世界大戦による成金の出現の一方で、インフレーションによる物価騰貴に基づく膨大な貧民層の形成が始まりつつあった。二〇年余りにわたって日本の下層社会のルポルターージュを続けた横山源之助が他界したのはこの年で、河上肇の『貧乏物語』が「大阪朝日新聞」に連載されるのは翌年である。

ここで、「王冠をつくる人」と共通のモチーフを持つ「竹の鞭」という恒藤の文章について触れておきたい。「竹の鞭」は明治四四年（一九一〇）八月三日と五日、（一）（二）に分けて、「松陽新報」に掲載された。「勤労親友会」を経営しているK氏についてのスケッチで、二千字余りのごく短い文章。（二）の末尾には「日記より」と記されている。署名は本名の井川恭。「松陽新報」は郷里松江の新聞で、恒藤の十年來の寄稿先である。

K氏は、「名代の貧民窟の万年町、山伏町」の「九尺二間の長屋」の立ち並ぶ「いろは長屋」でキリスト教の伝道をしているとあるが、なにごん短い文章なので彼についてこれ以上の説明はない。「大人の集まり」の前にある子ども会（讚美歌「みくにのよつぎ」を歌い、訓話めいたお伽噺をし、もう一度讚美歌を歌って帰っていく）の描写に八割近くが費やされ、「竹の鞭」という題も、K氏が竹の鞭を持って子どもたちの前で拍子を取って讚美歌を歌う場面から付けられている。したがって、テーマは、

闇の中へ忽ちに散つて行くエンゼルの群れ！われらが世は荒れたれど汚れれど、なんぢらが胸には花咲く野が緑りであらう。

と末尾近くに書かれているように、劣悪な環境の中に育つ子どもの無邪気さであると思われるが、貧しい町と人を描いて、

人間いづれが果敢なき生の営みならぬは無いものゝ、さて浅ましいやうな身につまされるやうな。

とあり、また末尾は、

いろは長屋の夜は更けた。破れ障子に明るい灯の色はわびしくきいろい窓から首を出すと、冷えた空気がしづかに頬にきすして、み空には眠む気な星のまたるきを仰ぐ。

と結ばれるような浪漫的な文章である。現実の「闇」の深さはそんな感傷を許さないことは言うまでもないが、「王冠をつくる人」に結実していく貧民問題への関心が、明治四四年の時点で胚胎していたことは確かである。ではこの関心はどこから来たか。関心の源は神戸「新川」での見聞にあると思われる。

恒藤は明治三九年（一九〇六）、八一人中三番の好成绩で島根県立第一中学校を卒業しているが、一高に入学したのは四三年である。このプランクの原因は慢性的消化不良で、体重が減少して一時は生命にも関わるような状況であったという。広川禎秀は『恒藤恭の思想史的研究』（大月書店、二〇〇四・二）において、恒藤の療養生活時代を「一生を通してもっとも自己内部に沈潜した時期」として、詳細に記録された日記と未発表の小説草稿「大空」<sup>⑥</sup>に拠って、恒藤の民衆観や自我意識の芽生えと変化を追っている。恒藤の病状好転の契機は、明治四一年九月に神戸市

眞合区の神戸衛生院へ入院したことであった。神戸衛生院はセブンスデー・アドベンチスト教会の医事伝道機関で、一ヶ月余の短い期間ではあったがキリスト教的雰囲気満ちた入院生活を経験し、白樺派の郡虎彦と出会っている。同区にある「名高い新川の貧民窟」を見たのもこの時期であった。

「大空」草稿では、主人公「賢三」が療養仲間の「乾」（郡虎彦がモデル）、露子と三人で海辺へ散歩に出かける途中に新川を通りがかり、賢三と乾の間にはこんな問答が交わされる。

「何故市役所とか警察とかいふものがあんな所をあんな儘に放却かして置くのでせう？」

「手が廻らるのでせう。それにそんなものは富と権勢を守る為に出て居るんですもの、一方貧民が墮落したつて其方の勝手だいに思つて居るんでせう」

「金満家つて奴あほんに狡い横着なものですな、一人で広い地面を思ふ儘にして大きな立派な家を建てて！ 貧民の呪詛的、夢見の悪い事でせうね、一体耶穌教の各派なんかもつと貧民救済に力を入れなくちや不可ですな」

キリスト教徒の乾は「今は心霊を救済すべき時」なのだと答えるが、賢三は「耶穌教の心霊それ自身が現今は墮落した浅ましい状態では無いですか」と追及する。乾はそれを認めつつも、中には「誠の信仰の人も少なくない」と言い、「洪水」と度び過ぎて野を洗ひ去つても、木の実草の種の幾粒かが残つて居たならば、野は再び美しい緑りに栄えませう」と言つのである。

乾のことは、「竹の鞭」のテーマ「闇の中へ忽ちに散つて行くエン

ゼルの群れ！われらが世は荒れたれど汚れれど、なんぢらが胸には花咲く野が緑りであらう。」に通じて次の世代に託す祈りの声となり、賢三の社会批判の目は、文学から法学に転じた恒藤自身の獲得した思想に裏打ちされて、「王冠をつくる人」に結実したのではないか。

「王冠をつくる人」では、敏兄さんの口を借りて貧民問題の捉え方が語られる。初めて「貧民窟」を見て嫌悪感でいっぱい少年に、兄さんはこう語りかける。

「僕の行らうとして居る事は慈善事業と云つたやうなものぢや無いよ、貧民を救つてやらうなんて云ふ訳ぢや無いんだ、救つてやる そんな考へで彼等に接すると云ふ事は大間違ひだよ、僕たちは平等な人格を持つて生まれて来たものだ。救つてやる それは神様の仕事だ、それに彼れらは自身でも救つて貰はうなんて考へは持つてゐない、少くとも僕たちの会の者たちは決してそんな考へは持つてゐない、彼等にはかれ等相当のプライドがある、尊むべきプライドなんだ」

「これは僕がかれらと実際に接触して知り得たところの大切な知識なんだよ、かれ等に対するにはその心持が肝腎だ、救つてやらうなんて考へたらほんとうに意味のある事はできやしない、かれらに同情する味方になつてやる、友人になつてやる 僕の目的はたゞそこにゐるんだ」

さらに二、三日経つて手伝いを申し出た少年に、兄さんは「心に抱いてゐる計画」を聞かせている。

「社会といふものは例へて見れば一つの大きい建築のやうなものな

んだ、高い屋根は空にそびえ、太い柱をならべ美しい窓をかざった壮麗な建築を仰ぎ見て感心する人は、その壮大華麗な建物を支へる礎の石が地の下に隠れて横たはつてゐる事を忘れてはならぬ、その建物の運命を安らかに保たうと思つたら先づその礎を堅める外は無い、労働者たちはその礎だ、社会の礎なんだ。隅の隅の一つの礎でも堅めたい、それが僕の社会に尽す可きつとめだと思つてゐる。」

「竹の鞭」には無かつた労働者の捉え方、社会の見方である。恒藤が文科から京大の法科に転じた一回生の時、沢柳事件が起きている。「大学の自治と研究の自由の確立をもたらした事件の解決を歴史的背景として、私が卒業したころの京大法科大学は甚だ意気旺んなものがあつたようにおもつ」と回顧するような学生生活において、恒藤がどのような思想を獲得するにいたつたかについては考察する準備も力量もないので、河上肇、米田庄太郎、高田保馬らに教えを乞つていることに注目して次の課題としたいが、第二の誕生日 を迎えた「僕」を導く敏兄さんの労働者観はたいへん新しい見方だったのである。

貧窮の中から身をおこす豆腐売りの少年を主人公に人気を博した少年小説「あゝ玉杯に花つけて」(佐藤紅緑「少年倶楽部」昭二・五同三・四)は、題名の通り一高入学で大団円となる。恒藤の少年小説は、そうした大衆受けのする要素に乏しいが、悩み、迷い、考える少年を描いて、現在も新しく、懐かしい。

## 注

- ① 「恒藤恭の少年小説」(『現代に甦る知識人たち』鈴木良、上田博、広川禎秀 編 世界思想社、二〇〇五・一〇)
- ② 「中学世界」掲載のものを本稿のテキストとしたが、「王冠をつくる人」

の作品本文は、『若き日の恒藤恭』(山崎時彦編 世界思想社、一九七二・一)その改訂増補版である『恒藤恭の青年時代』(山崎時彦編著 未来社、二〇〇三・一〇)に記載されている。

③ 「序」(『貧乏物語』河上肇、岩波文庫)

④ 『向陵記 恒藤恭 一高時代の日記』 大阪市立大学大学史資料室編、二〇〇三・三

⑤ 作品中のトルストイの肖像は、この日記にある「トルストイ伝」のものかと思われるが特定できなかった。「白樺 第十周年記念号」(大八・一)にはワグネルやイブセン、ドストエフスキー、ロマン・ロランなどと共にトルストイの写真が掲げられてあり、そこには敏兄さんの書齋にあつた肖像を想像するよすがになりそうな、杖を手に「暗い木の蔭」に倚っている厳しい表情のトルストイが写っている。

⑥ 井川天籟の筆名で書かれた二九〇枚余の手書き原稿で、ルビは恒藤自身によって付されたものである。広川禎秀は『恒藤恭の思想史的研究』において、執筆時期を明治四二年(一九一〇)前半期と推測している。

⑦ 広川『恒藤恭の思想史的研究』によれば日記(明四一・九・一八付)に記述がある。

⑧ 「忘れえぬ人々 その一 栗生武夫君の追憶」(『法律時報』一九六三・一、広川前掲書より引用した)

尚、引用文中の漢字は新字体に改めている。また、「竹の鞭」、「大空」草稿は共に大阪市立大学恒藤恭資料室所蔵の資料を閲覧させていただいた。

(本学非常勤講師)